〔研究ノート〕

大和文華館蔵
「摺仏紙背蓮阿書状」・「毘沙門天摺仏仮名消息」について

大和文華館が所蔵する中村直勝氏（1890～1976）旧蔵の古文書コレクション「双柏文庫」には、40点を越える仏教版画が含まれています。この中には、中山寺十輪院伝来毘沙門天立像（現・東京国立博物館蔵）像内納入品の毘沙門天印仏や、京都・浄瑠璃寺九体阿弥陀如来坐像の像内納入品であった阿弥陀如来印仏など、わが国の仏教版画史における重要作例が多数含まれることから、すでに『大和文華』において詳しく紹介されています（鈴木喜博「大和文華館の仏教版画」『大和文華』113号、2005年）。この論考では仏像の納入品であった仏教版画が中心でしたので、本稿ではこの中で取り上げられなかった「摺仏紙背蓮阿書状」・「毘沙門天摺仏仮名消息」という2点の仏教版画について考えてみたいと思います。〔※作品の名称は「摺仏」となっていますが、「摺仏」「印仏」の呼称については厳密に区別することが難しく、本作品が技法的にスタンプのように印捺するものであることから、本稿ではわかりやすく「印仏」と呼称します。〕

当館蔵の「摺仏紙背蓮阿書状」（30.3cm×49.6cm／「文①」と略称）、「毘沙門天摺仏仮名消息」（29.7cm×51.0cm／「文②」と略称、図1）の2点は、名称が異なるものの同じ印仏を伴う作品です。「書状」「消息」と名称がついているように、文①は蓮阿が七条法眼御房に宛てた書状が、文②にも筆者不詳ながら消息（手紙）が書かれており、いずれもその筆跡から鎌倉中期頃に書かれたものと推定されています。

これらの裏面には、同じ毘沙門天の印仏がびっしりと捺されています（図2）。裏打紙によって不鮮明ではありますが、高5.2cmの毘沙門天印仏が縦5体×22列の合計110体捺され、上部には2列ごとに日付を示す書付があり、また消息面の右上にはいずれも「一日十躰」と墨書されます。

さて、禿氏祐祥編『古代版画集』（中外出版、1923年）に、猪熊信男氏蔵「毘沙門天像」として、文華館本とまったく同じ印仏を印捺する作品（3紙、各29.7cm×45.7cm）が紹介されています（図3・4）。10日分の日付とともに一紙に100体の毘沙門天を印捺するもので、その紙背には「御祈所／奉転読／大般若経毎日読誦十巻／右於二上御宝前六口僧結番致毎日転読之勤、奉祈志者為正朝安穏天長地久也、仍凝忠節奉祈状如件／安元元年十二月日　大法師良西」と記されます。これは修法の種類や経典を読誦した回数、出仕する僧侶の人数などを記録し、願主に提出するための「巻数（かんじゅ）」の性格をもつもので、これによって安元元年（1175）12月に、二上神社の宝前にて六人の僧侶が交代で大般若経を毎日10巻ずつ転読する法会を発願し、それにあわせて1日10体ずつ毘沙門天印仏を捺したものであることがわかります。この猪熊氏蔵本は、印仏の用紙をそのまま巻数に用いるという印仏作法の実例として知られているものです（佐々木守俊「覚音寺千手観音菩薩立像と納入印仏」『美学美術史学』22号、2008年）。なお、大般若経は全部で600巻から成るものですので、1日10巻を転読すると、すべてを読誦し終えるには60日かかることになります。猪熊氏蔵本は一紙に100体を捺していますから、10日で1枚とすると、60日分として元来6紙あったと推定されます。

そして、この猪熊氏蔵本の存在によって、同じ印仏（図5）を捺す文華館本が、実は表面の消息よりも古い平安時代のものであるということがわかるのです。おそらくこの印仏を反故紙として、後世に消息を書いたものでしょう。

以上をふまえて、あらためて各紙に記されている日付に注目してみましょう。『古代版画集』によると猪熊氏蔵本は3紙あり、それぞれ3月29日～4月8日（猪❶）、3日～12日（猪❷）、10日～19日（猪❸）の日付が記されているとのことです。一方、文華館本の日付をみますと、文①は（4月）22日～5月2日、文②は（5月）25日～6月5日となっています。この日付をもとに5枚を並べてみると、猪❶→猪❸→文①→猪❷→〔欠〕（5月13日～24日分）→文②の順番に並べることができ、この印仏が捺されたのは3月29日から6月5日の期間であったことが判明します。このように日付がきれいに並ぶことから、猪熊氏蔵本と文華館本は、同じ法会で印捺された一具のものであることが日付の上からも確認され、推定通りもとは6枚あったということも判明するのです。猪熊氏蔵本で30日分、文華館本で22日分の印仏がありますから、欠失する5月13日～24日では8日分の印仏が捺されている可能性が考えられます。猪熊氏蔵本と文華館本とをあわせて考えることにより、安元元年12月に発願された良西らによる印仏作法を伴う大般若経転読法会が、翌年の3月29日～6月5日にかけて行われたということがわかり、平安時代の印仏作法の実態をより具体的に知ることができるのです。

なお、もと6枚一具であったこれらの印仏が散逸した経緯は明らかにはできません。猪熊信男氏（1882～1963）は、宮内省図書寮御用掛や広島大学教授などを歴任した歴史学者であるとともに、古文書コレクターでもありました。その膨大なコレクションは、現在広島大学（猪熊文書）と四天王寺大学（恩頼堂文庫）に分蔵されています。しかし両大学から刊行されているいずれの文書目録にも「毘沙門天像」が記載されておらず、残念ながら現在は所在がわからない状態です。一方、中村直勝氏がこの作品をいつ入手したかは不明ですが、昭和35年（1960）に刊行された『中村直勝博士蒐集古文書』には文華館本がすでに掲載されています。実は猪熊氏と中村氏は、古文書の借覧を仲介するなど浅からぬ交流があったことが当時の書簡によって知られますので、あるいはこうした2人の交流の中で、この毘沙門天印仏が分蔵されることになったのかもしれません。

（一本崇之）

※図3・4は禿氏祐祥編『古代版画集』（中外出版、1923年）より複写。その他は筆者撮影。

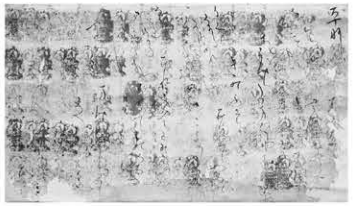
図1「毘沙門天摺仏仮名消息」

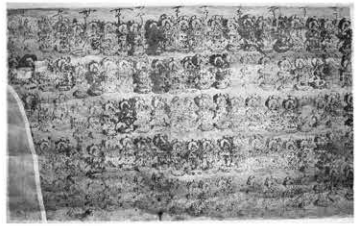
図2「摺仏紙背蓮阿書状」（裏）

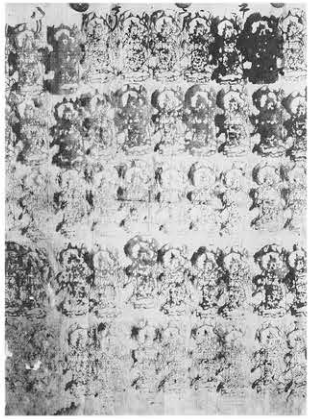
図3　猪熊氏蔵本（部分）

図4　猪熊氏蔵本（拡大図）

図5　文①（拡大図）

季刊 美のたより No.221
令和5年1月6日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.